

輩行字（通字）の多様性が示すもの

—フエ・フォンヴィン社に居住する中国系住民の命名法を事例として

木 村 自

Variety of Middle Names among the People of Chinese Origin:
Case Study of the Naming System in Huong Vinh Village

KIMURA Mizuka

本稿はフエ・フォンヴィン社に居住する中国系住民の「輩行字（通字）」システムを紹介・分析することを目的としている。フエ・フォンヴィン社に居住する中国系住民は、必ずしも大規模リネージを構成している訳ではない。実際には、数多くの小規模リネージ・家族が存在する。フォンヴィン社の中国系住民の輩行字（通字）システムは、ベトナム式通字システム、輩行字繰り返し型システム、中国式輩行字システムの三種類に分類できる。中国系住民の輩行字（通字）システムにこのような差異が生じたのは、リネージ自体の規模、各華僑会館との心理的距離、族譜の有無などが大きく関わっている。

キーワード：中国系住民、輩行字、通字、リネージ

はじめに

1945年に行われた調査をもとにした報告書のなかで、陳荊和はフエのミンフォン（明郷）社で見られる姓として41個の姓を挙げている。陳荊和の指摘するところによると、この41の姓のうち、Cam（甘）、Chu（朱）、La（羅）、Hâu（侯）、Luu（劉）、Nhan（顔）など複数の姓は、キン族の姓にはめったに見られないものであるので、おそらくは中国系住民に起源をもつものであろうと結論付けている¹⁾。こうした姓

1) 陳荊和1964年『承天明郷社陳氏正譜』（東南亜研究専刊之四）香港中文大学新亜研究所東南亜研究所刊。フォンヴィン社の陳氏の移住と族譜については、Dao-Duy-Anh 1943 “Phổ Lô, Première Colonie Chinoise Du Thù' a - Thiên.” *Bulletin des Amis du Vieux Huê*, XXXe Année, No. 3, 249-265. にも記述がある。

のいくつかは今日のフェ、フォンヴィン社にも見ることができ、それらの姓をもつ家族は「明郷」（あるいは時に「漢人」）を自称している。本稿は、現在フェ市近郊にあるフォンヴィン社において、自らおよびその家族を、「明郷」もしくは華僑など、中国に起源をもつものとして自認している人々（以下「中国系住民」とする）について、彼らの輩行字（通字）の特徴を記述するものである。

フェ市近郊旧ミンフォン社の陳（Trần）氏リニージの歴史およびその族譜については、陳荊和による明郷の研究において十分に分析されている。陳（Trần）氏リニージは極めて多くの構成員をもつ巨大なリニージであり、明郷の典型として研究がなされている。一方、フォンヴィン社に今日居住する明郷人や中国系住民の多くが陳（Trần）氏リニージ同様に多くの構成員を有している訳ではない。むしろ逆に、今日でもフォンヴィン社に居住している中国系住民の多くは、成員が極めて少ない小規模のリニージ（というよりむしろ家族）を構成しているに過ぎない。従来、ベトナムの明郷や華人を分析した研究成果においては、大規模リニージを明郷の典型例として分析しており、これら小規模の中国系住民の家族やリニージは記述の埒外にあった²⁾。しかし、フォンヴィン社の歴史上のミクロレベルの文化交渉を理解するには、こうした小リニージあるいは小家族は例外として捨象してもよいわけではなく、フォンヴィン社における中国系住民の今日的な在り方を知る上で、重要な事例を提示してくれる。

本稿は、フェ市近郊フォンヴィン社に居住する中国系住民の「輩行字」（もしくは中字・通字、ベトナム語で *Chữ đệm*）の実際を紹介することに主眼を置いている。フェ・フォンヴィン社の中国系住民がもちいる輩行字（通字）のシステムは極めて多様である。もちろん、そうした輩行字（通字）システムが維持されていない例も見られる。そうした多様な輩行字（通字）のあり方を移住史と家族形態のありかたと関係付けながら分析したい。

1. ベトナムにおける中国系住民とそのリニージ・家族、および命名システム

本論に入る前に、本稿でもちいる用語の解説と、ベトナムにおける明郷人の命名システムについて先行研究を参考しながら検討したい。

1.1 中国系住民 明郷（Minh Hương）、華（Hoa）、漢（Hán）

本稿で用いる「中国系住民」とは、先述のように明郷人を含め、祖先が中国からベトナムに移住したという歴史的記憶を有する人々を指す。そうした歴史的記憶は、族譜のなかに記載されていることもあれば、すでに当人たちの記憶の片隅に存在しているだけの場合もある。いずれにせよ、フェ・フォンヴィン社において、祖先が中国からベトナムに移住したと理解している人々を、本当ではすべて「中国系住民」と呼ぶ。

とはいえ、民族名称としては身分証明書に明確に記載され、当人の記憶とは無関係に彼らのエスニシ

2) 陳荊和1964年上掲書や、チュオン・ズイ・チー [張惟持] 2007年「越南会安明郷張敦厚族会安における生活と統合の過程」『中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究 研究討論会』（2007年12月1日-2日に東京外国語大学本郷サテライト教室で行われた報告の発表原稿）などを念頭に置いている。

ティを決定している。筆者の知る限り、中国系住民の身分証明書に記載される民族名称には大きく3種類ある。一つ目は他の大多数のベトナム人同様に、キン（Kinh）族と記載されるものである。当人は中国系住民を称するが、身分証明書上はキン族とされる。二つ目は、華（Hoa）人である。比較的近年にベトナムに移住した華僑などは、キン族でなく、華僑であることを示すために、身分証明証に「Hoa」と記述することができる。ベトナムの民族分類上では、華僑華人は正式には「người Hoa」という民族呼称を賦与されている³⁾。三つ目は、「Hán（漢）」である。ベトナムの民族分類上には、中国系住民にたいして「Hán」という民族名が付与されていることはないようである。ただし、筆者が調査した人々の何人かは、確かに身分証明証上の民族名に「Hán」と記載されており、民族政策上の揺らぎが見られる。中国系住民を、身分証明書上の民族分類から検討した場合、以上の三つの民族区分が見られる。

他方、身分証明書上の民族分類に明示されないエスニックな区分として「明郷（ミンフオン）」がある。「明郷（ミンフオン）」とは、教科書的な理解としては明朝の遺臣であり、清朝の迫害をのがれて来越し、その後明香社に入ってベトナム籍になった人々とその子孫を指す。同時に、一般的にはベトナム人と混血した中国系住民も意味している。

しかし、筆者が聞き取り調査を行ったフオンヴィン社の中国系住民は、自らを必ずしもこうした教科書的なエスニック・民族分類のなかでとらえている訳ではない。もちろん、身分証明書上の民族分類と、彼らが自らのエスニシティを語る際に用いる語彙とは必ずしも一致しない。身分証明書の民族記載欄にキン族として記されている人でも、自らのエスニックなカテゴリーを「ミンフオン」と述べたり、「Hoa」と述べたりする人も存在していることは当然のこととしても、明らかに「ミンフオン」（つまり、清朝初期に来越している）であると理解されるにも拘わらず、自ら「Hoa」と述べる人もおり、エスニシティ・民族呼称の自己認識については、単純ではない。第2節で提示する各現地インフォーマントの民族名は、身分証明書上に記載されている民族名を示し、身分証明書上の民族名と自己認識上の民族名が異なっていた場合には、脚注にて注記する。

1.2 リニージおよび家族

「リニージ」および「家族」についても、本稿における使用法を簡単に説明しておきたい。共通の祖先を持つ単系の出自集団として規定されるリニージは、中国では一般的に「宗族」と呼ばれ、ベトナムにおいては「ゾンホ（đòng họ）」と称される。中国やベトナムのリニージ集団（宗族・ゾンホ）は、父系の出自を同じくする人々によって形成されている。こうしたリニージ集団は、一族の祠堂を共有し、族

3) 古田元夫1991年『ベトナム人共産主義者の民族政策史 革命のなかのエスニシティ』(大月書店)、およびチャン・ホン・リエン(新江利彦翻訳・訳注)「越南における華人の統合と文化交流(信仰と宗教を中心に)」MIO Yuko ed. *Cultural Encounters between People of Chinese Origin and Local People: Case Studies from the Philippines and Vietnam* (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、77-86)などを参照のこと。

田（台湾などでは「公業」、ベトナムでは香火田 [đất hương hoá]⁴⁾ と呼ばれる) を有し、族譜⁵⁾ を持っているような集団を指して呼ばれるのが普通であり、ある種の外婚集団を形成する。

こうした父系出自を共有するリネージ集団が、中国においてもベトナムにおいても典型的な親族集団として理解されるが、他方で、中国人もしくはベトナム人のすべての家族・親族集団が、祠堂、族田、族譜を有するような親族集団を形成している訳ではない⁶⁾。本稿で記述するフオンヴィン社の中国系住民の場合、いずれの親族集団も父系の出自集団であることは確かである。しかし、その親族集団の規模や同族者との結び付きの度合いなどは、各親族集団で極めて多様な様相を呈している。とくに、祠堂、族産、族譜のいずれかもしくはすべてを欠いている場合や、そもそも1家族しか居住していないようなケースもあり、そうした集団については、「父系リネージ」、「宗族」、「ゾンホ」などの呼び方に慎重にならねばならない。

リネージ、宗族、ゾンホなどをめぐる上記の議論を踏まえて、いささか恣意的ではあるが、本稿では祠堂、族田、族譜のいずれかを所有し、1家族のみで成立していない親族集団、もしくは他の地域に居住する同族集団とある程度密接な関係を維持している親族集団についてリネージという用語を用い、それ以外の中国系住民については「家族」を用いることにする。

1.3 ベトナムの一般的な命名システムとホイアン華人・明郷人の命名システム

ベトナム、キン族男性の一般的な命名システムは、姓の後ろに通字（ベトナム語では Chữ đệm）を付け、その後に個人を識別する名を付与する。姓のみではなく、通字が同一父系リネージを識別指標となる。そのため、ある父系リネージが分支して、別の父系リネージを設立するときには、通字を変更することで、元来の父系リネージとの差異化を図ることもある⁷⁾。つまり、父系リネージの継承という点から言えば、男性成員の通字が世代を越えて共有されることが、極めて重要な要素ということになる。

他方、古典的な中国人の命名システムを考えると、ちょうどベトナム、キン族男性の命名システムの逆であり、姓の後に続く「輩行字」は、世代を越えて同一のものが続くことはない。むしろ、輩行字は同一父系リネージ内における世代の深度を示すものであり、同一の輩行字を有することは、共通祖先か

4) ベトナム（北ベトナムもしくは統一後のベトナム）で行われた数度にわたる土地改革で、多くの地域では「香火田」が国有化され、小作農民に分配された。しかし、フェ・フオンヴィン社における聞き取り調査では、必ずしも厳格な土地の再分配が行われた様子はなく、現在でも一部のリネージ（ゾンホ）は、「香火田」を有している。

5) ベトナムの家譜については、末成道男1995年「ベトナムの『家譜』」（東洋文化研究所紀要第127冊、1-42頁）を参照されたい。

6) 中国の宗族・家族については、瀬川昌久2004年『中国社会の人類学 親族・家族からの展望』（世界思想社）を参照のこと。同書においても、瀬川が調査をした香港の混姓村落において、必ずしもすべての父系出自集団がリネージを形成している訳ではないことが記述されている。

7) 宮沢千尋2000年「ベトナム北部の父系・外婚・同姓結合」吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『〈血縁〉の再構築 東アジアにおける父系出自と同姓結合』（風響社、185-211）や、島尾稔2000年「19世紀-20世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」『〈血縁〉の再構築 東アジアにおける父系出自と同姓結合』（風響社、213-254）においては、ニュアンスの差こそあるものの、ベトナム・キン族の通字・中字（ミドルネーム）が同族意識の創出と密接に関係していることが議論されている。

ら数えて同一の世代に属していることを意味している。また、世代を越えて同一の輩行字を用いることは、基本的には忌避される⁸⁾。

それでは、ベトナムの中国系住民、とくに明郷人（ミンフオン）の場合はどうだろうか。ベトナム、ホイアン明郷人張敦厚一族の移住史と生活慣習の変容を論じたチュオン・ズイ・チーの研究報告によると、ホイアン明郷の命名システムの特徴は、ベトナム・キン族のように、世代を越えて共通の通字を用いる命名システムではなく、むしろ世代ごとに同一の文字を用いる輩行字システムである。これらの輩行字の由来について、チュオン・ズイ・チーの論考では以下のように記述されている。「広東、福建などの南中国各省から会安に渡来した各氏族は、渡来に際してみな自分たちの家族の荷物の中に一對の対聯を入れていた。その対聯の字の一つ一つが、一族の男性構成の世系（世代、generation）を表す通字（ten lot, middle name）として用いられた⁹⁾。」つまり、ホイアンの明郷人¹⁰⁾においては、保持している対聯に書かれている字の順番に沿って父系リネージの男性成員の輩行字が決定される。

もちろん、こうしたベトナムの中国系住民、とくに明郷人の命名システムはかなりモデル化されたものである。ベトナムの中国系住民がベトナム・キン族のように通字を使うのか、中国人的に輩行字を使うのかは、多分にその当時の歴史的・政治的・社会的状況に依存しており、一般化することはできない。また、後に見るように、明郷人の場合、輩行字に用いる字句を、数世代ごとに繰り返すような場合も見られ、独自の命名システムと考えることもできる。

ベトナム・キン族、中国人、明郷人など多様な命名規則に鑑み、本稿以下の記述においては、「中字」「通字」「輩行字」「輩行字（通字）」をそれぞれ次のように用いる。まず、ベトナム・キン族、中国人、明郷人を含め、父系リネージ男性構成員の姓名について、3文字の真ん中の文字を「中字」と呼ぶ。「中字」のうち、世代を越えて同一の字が用いられる場合、その文字を「通字」と呼ぶ。また、世代ごとに異なる「中字」が用いられる場合、その文字を「輩行字」と呼ぶ。そして、本稿で分析するフオンヴィン社の中国系住民の名前のように、通字的でもあり、輩行字的でもある「中字」については、「輩行字（通字）」という書き方をする。

2 フェ近郊フオンヴィン社における中国系住民の移住史と命名システム

筆者は、フェ市近郊フオンヴィン社（ミンタイン村・ディアリン村・バオヴィン村）において、中国系住民11家族の現地インフォーマントに、彼らの祖先の移住の歴史とアイデンティティに関する聞き取り調査を行った。同時に、祠堂や各家庭における祖先祭祀の方法、族譜の有無、親族ネットワークなどについても調査した。本稿の分析対象である中国系住民の命名法は、そうした聞き取り調査をとおして得られた資料に基づいている。

8) もちろん、今日の中国においては、こうした命名慣習はすでにさほど用いられなくなっている。

9) チュオン・ズイ・チー前掲論文、5頁。

10) ホイアンの明郷人については、黄蘭翔2008年『越南：傳統聚落、宗教建築與宮殿』（中央研究院人文社會科學研究所 亞太區域研究專題中心）において、とくに「会館」と「亭」など建築物との関係で論じられている。

フォンヴィン社、とくにミンフオン村（現在はタインハ村と合併して、行政区分上ミンタイン村となっている）は、19世紀初頭から徐々に衰退し始める。中国系住民が移り住み、村の前を流れるフォン川に多くのジャンク船が往来していた頃には、ミンフオン村は商業の一大中心地となり、大きく栄えていた。しかし、ミンフオン村に面した船着き場付近に土砂がたまり、大型のジャンク船の往来が困難になると、ベトナム・ジャンクはバオヴィンに寄港するようになり、中国ジャンクはチョーディン（Chợ Dinh）に寄港するようになった。チョーディンにはすでにミンフオンから数多くの中国系住民が移り住んでいた。ミンフオンの商況は次第に悪化し、そのため、「商業に従事する中国人全員がチョーディンの付近や他所に移住していくと、商業で生活していた混血者（les métis）¹¹⁾ 全員も、商売に適した場所を求めてミンフオンを離れ、祠堂の維持を任されたり、極めて少数ではあるが、農業に従事したりする人々を除いては、村には誰も残らなかった¹²⁾。」

こうした自然環境や経済状況の変化を背景として、今日フォンヴィン社に居住している中国系住民の父系出自集団の多くは、規模が比較的小さい。以下ではこうした小規模家族を含め、フォンヴィン社に居住する中国系住民の移住プロセスと、彼らの第1祖から今日まで至る命名の実際とを、ミンフオン村、ディアリン村、バオヴィン村の三つの村落に分けて記述したい。

2.1 ミンフオン村

ミンフオン村には移住深度の深い中国系住民が現在でも居住している。以下では、陳（Trần）、劉（Luu）、顔（Nhan）、洪（Hồng）、甘（Cam）の五つの中国系住民の家族について、その移住の歴史と輩行字（通字）を中心とした命名法について紹介・分析する。また既述のように、各リネージもしくは家族名を示した小節の右に括弧で示した民族名は、彼らの身分証明書上に記述されている民族名である。

2.1.1 陳（Trần）氏リネージ（キン族）

すでに述べたように、ミンフオン村における陳氏リネージは、フェにおける有力な明郷リネージの一つである¹³⁾。陳氏リネージは2家族が現在でもミンフオン村に居住している。他のリネージメンバーは、アメリカ合衆国を含む複数の地域に移住していった。

陳氏リネージについては、陳荊和が整理した『承天明郷社陳氏正譜』に詳細に分析されている。そこで、まずは同『陳氏正譜』を参考にしながら、陳氏リネージの輩行字（通字）システムを検討してみよう。同『陳氏正譜』には、世代ごとのリネージ構成員名が記載されている。陳氏リネージでは、輩行字（通字）は次の順番で出現する。

1. Dượng

11) 混血者とは明郷人を指示していると思われる。

12) Dao-Duy-Anh 1943 et al. P. 263.

13) フェにおける陳氏リネージ以外の明郷有力リネージとしては、フェ市内に居住している林（Lam）氏リネージの規模が大きい。フォンヴィン社に祠堂のみが存在し、誰も居住していないので、本稿では触れない。

2. Hoài
3. Nghinh
4. Nguyễn
5. Sĩ
6. Triều
7. Dương
8. Hoài
9. Nghinh
10. Nguyễn
11. Sĩ

陳氏リニージの来越第1祖は Tran Dương Thuận (陳養純) であり、その輩行字（通字）は Dương (養) である。上記に輩行字（通字）として出現する字の順番をもとに、陳荆和は陳氏リニージの輩行字（通字）について、2点の興味深い問題を指摘している。一つ目は、6世代ごとに同一の輩行字（通字）が出現するという点である。陳氏リニージの輩行字が有するこの特徴は、輩行字が繰り返し使用されることのない中国の伝統的な輩行字システムとは明らかに異なっている。よって、陳荆和は「これが明郷人に共通する特徴なのか、それとも陳氏リニージのみのケースなのかは分からないが、中国の名前のシステムを大きく変えたことは確かである¹⁴⁾」と分析する。確かに、第6世代の輩行字（通字）である「Triều」が終わると、次に来越第1祖の輩行字（通字）と同じ Dương が表れる。輩行字（通字）が数世代ごとに繰り返されるといえる点が、陳氏リニージの命名システムの特徴の一つであると言えよう。

陳氏リニージの輩行字（通字）について陳荆和が述べるもう一つの特徴は、輩行字（通字）システムの変容である。陳荆和によれば、「第8世代以下の直系男子は、字に『踐 (tiễn)』の字を用いるようになっている。……こうした命名方が陳踐誠 (Trần Tiễn Thành) の栄光を引き継いでいると同時に、陳氏のリニージメンバーがベトナムの慣習に従い始め、『踐 (tiễn)』を通字 (Chữ đệm) として認識し始めていることを意味している¹⁵⁾。」現在のミンフォン村陳氏リニージのなかでは、「踐 (tiễn)」は通字となっていると言ってもよい。たとえば、陳氏リニージは2005年に世界中から陳氏リニージのメンバーを迎えて、フエ市内でゾンホ会議を開催した。彼らはこのゾンホ会議を「陳踐ゾンホ会議 (Buổi Họp Mặt Dòng Họ Trần Tiễn)」と呼んでいる。「陳」ではなく、実際には「陳踐 (Trần Tiễn)」がすでにリニージ名になっている。

こうし陳荆和の分析とは少し異なる語りが、フォンヴィン社で聞かれたということも、ここでは記述しておかねばならない。陳荆和による上記二つの分析に対して、筆者らがインタビューを行った陳氏リニージのインフォーマントである Trần Nguyễn Đăng 氏によると、輩行字（通字）を6世代ごとに繰り返し用いていたのは1945年までであったという。1945年以降リニージ構成員は輩行字（通字）そのもの

14) 陳荆和前掲書、30頁。

15) 陳荆和前掲書、30頁。

に固執しなくなり、好きな文字を中字として使用するようになった。また同時に Trần Nguyễn Đăng 氏は、「踐 (tiễn)」が陳氏リネージの男性成員に共通する通字になっていることを否定しており、中字にはいかなる文字を用いてもよいと述べている。こうした認識の差異は、陳氏リネージの支系の問題ともかかわっている可能性があり、今後の検討を要する。

2.1.2 劉 (Lư) 氏リネージ (キン族¹⁶⁾)

2008年には Lư Nguyễn Tô 氏に、2009年には Lư Thị Nghiên 氏と Lư Đức Dung 氏に劉氏一族の移住史と輩行字 (通字) に関するインタビューを行った。Lư Nguyễn Tô 氏は1935年に生まれ、2008年時点はミンフオン村にある劉氏の祠堂に増設されている家屋に居住している。また Lư Đức Dung 氏は1946年生まれで、現在ハノイに居住している。

ベトナム語で記述された劉氏の家譜によると、劉氏一族の祖先は、明朝期に中国の福建省からミンフオンに移り住んだ。彼ら劉氏の祖先は、中越間の陶器の交易を行っていたとされる。

最初に福建省からベトナムに移り住んだ第1祖は劉士榮 (Lư Sĩ Vinh) であり、第2祖は劉承基 (Lư Thừa Cơ) である。また第3祖は、劉大成 (Lư Đại Thành) である。よって来越第1祖から第3祖までの輩行字 (通字) は、士 (Sĩ)、承 (Thừa)、大 (Đại) である。第3祖に続く祖先の輩行字 (通字) は、Triều (第4祖)、Thế (第5祖)、Thiện (第6祖)、Nguyễn (第7祖) となる。インフォーマントである Lư Nguyễn Tô 氏の祖父は Lư Nguyễn Sanh であり、第1祖から数えて劉氏リネージの7番目の子孫となる。Lư Nguyễn Tô 氏によると、もし劉氏一族の輩行字 (通字) のルールに従うならば、彼の父は第8世であるので、輩行字 (通字) は「士 (Sĩ)」に戻るべきであった。しかしながら、彼の祖父に続く輩行字 (通字) は、ベトナムの通字のように同一の中字が用いられている。Lư Nguyễn Tô 氏の父は Lư Nguyễn Khánh であり、やはり輩行字 (通字) に Nguyễn が使われている。ところが、劉氏の家系図によると、第11代目には再び「士 (Sĩ)」を輩行字 (通字) として使用しているメンバーもいることが分かる。

一方、劉氏リネージには二つの支系があり、両者ともにフェ市近郊に位置している。一つはグービン (Ngư Bình) にあり、もうひとつがミンフオン村の現地インフォーマント Lư Nguyễn Tô 氏の祠堂を中心とする。現在ハノイにも多くのリネージメンバーがいるが、彼らは今でもミンフオン村の支系に属している。ハノイに居住するリネージメンバーは、すでにミンフオン村で使われていた輩行字 (通字) システムを使用しておらず、通字として「徳 (Đức)」を使用するようになっている。ハノイに居住するリネージメンバーは、共産主義革命に参加し、その際に通字を「徳 (Đức)」に決めたということである。

上記をまとめると、劉氏リネージの輩行字 (通字) システムは次のようになる。

1. 士 (Sĩ)
2. 承 (Thừa)
3. 大 (Đại)

16) 身分証明書上にはキン族と記されているが、本プロジェクトで行った全戸調査では、Lư Nguyễn Tô 氏は調査票の民族記入欄に「Hoa (華)」と記載していた。

4. Triều
5. Thê
6. Thiên
7. Nguyễn
8. Nguyễn ハノイ居住者
9. Nguyễn 徳（Đức）
10. Nguyễn 徳（Đức）
11. Sĩ 徳（Đức）

輩行字（通字）システムの変容と劉氏リネージ構成員の凝集性、族譜の再編纂について、Luữ Đức Dung氏は次のように答えている。

来越初期の頃には、輩行字（通字）システムは正確に守られていたが、歴史が下ると次第に輩行字（通字）システムが乱れ、3代連続で「Nguyễn」を通字として使うような状況が生じた。そのため、相互に同一氏族に属しているのかどうかもわからなくなっていた。そこで、1963年ごろから、当時族長であったLur Nguyễn Tin氏（第10世）が自分の祖先のルーツを調査し始め、輩行字（通字）システムを再発見して、自分の息子たちに再び「Sĩ」という輩行字（通字）を付けた。

第11世から輩行字（通字）として再び「Sĩ」を使い始めたのは、劉氏リネージの構成員の一部が、自らのリネージの輩行字（通字）システムが「ベトナム化」していることを意識しなおしたことが理由であることが、以上のインタビュー内容から理解することができる。命名法の「ベトナム化」から抜け出そうとする傾向を見ることができよう。

2.1.3 Hồng（洪）リネージ（キン族）

Hồng（洪）リネージに関する現地インフォーマントはHồng Du Thắng氏である。彼は1965年に生まれ、2009年現在ミンフオン村の村長をしている。洪氏一族の族譜はフエ市内に居住しているHồng Du Thắng氏の兄の家に保管されている。Hồng Du Thắng氏の説明によると、族譜に記載されている彼ら洪氏のベトナムにおける開始祖は、清朝期に福建省の泉州から来越した。祖先は、漢方薬ではなくベトナム薬（Thuốc Nam）を販売していたというのがHồng Du Thắng氏による説明である。

以下では、Hồng Du Thắng氏とのインタビュー内容と、洪氏の族譜および家系図などから、洪氏リネージの命名法を紹介する。ただし、複数ある族譜の記載内容に一部齟齬があり、インタビュー内容とも一致しない部分もあり、詳細については今後の分析を待たねばならない。

Hồng Du Thắng氏へのインタビュー、およびベトナム語で記された家系図の記述によると、来越第1祖はHồng Trí Nghĩa（洪致義）であり、その息子の一人が第2祖となるHong Trach Ninh（洪澤寧）¹⁷⁾である。第2祖以降、村長のHồng Du Thắngとその息子に連なる父系リネージの直系構成員の姓名を上げると以下のようなになる。

17) ベトナム語で書かれた家系図には、第2祖は「Hồng Trạch Mỹ」と記されている。

1. Hồng Trí Nghĩa (洪致義)
2. Hồng Trạch Ninh (洪澤寧)
3. Hồng Di Ngoan (洪彌玩)
4. Hồng Long Sỹ
5. Hồng Quang Tuy
6. Hồng Dư Thắng (インフォーマント・村長)
7. Hồng Khắc Tiên Sinh¹⁸⁾

よって、輩行字のシステムは「Trí」「Trạch」「Di」「Long」「Quang」「Dư」「Khắc」となる。また Hồng Dư Thắng 氏の説明によると、それに続くのは「Xương」「Vĩnh」「Thọ」「Phú」「Cương」である。ただし、これは Hồng Dư Thắng 氏の説明によるもので、族譜に記載されている順序は、これとは少し異なる。また、ベトナム語で記された族譜と漢字で記された族譜の間にも幾分違いがある。少し詳しく見てみよう。

まずベトナム語で書かれた族譜であるが、そこにはホイアンの明郷についてチュオン・ズイ・チーが分析したように、一对の対聯のごときものが見られる。そこに記された輩行字（中字）の順序は、「惟 (Duy)、以 (Dĩ)、遂 (Toài)、振 (Chấn)、致 (Trí)、澤 (Trạch)、彌 (Di)、隆 (Long)、光 (Quang)、裕 (Dư)、克 (Khắc)、昌 (Xương)、富 (Phú)、壽 (Thọ)、永 (Vĩnh)、強 (Cương)」となっている。Hồng Dư Thắng 氏の息子以降の輩行字（通字）の順序については、同氏の記憶違いと考えられる。他方、嗣徳17年（1863年）に編纂された（漢字で記された）族譜（『洪譜目録』）では、輩行字（通字）の順序が、ベトナム語で記された族譜と異なっている。とくに「裕 (Dư)」以降が異なっており、「永 (Vĩnh)」「昌 (Xương)」「慶 (Khánh)」「生 (Sinh)」「益 (Ích)」「強 (Cương)」となる。加えて、来越第1祖の扱いも、漢字バージョンの族譜とベトナム語で編集されなおされた族譜とでは異なっている。維新3年（1909年）に Hồng Di Ngoan (洪彌玩) によって編纂されたと思われる洪氏族譜には、「一世」として、Hồng Trí Nghĩa (洪致義) の父親の「洪振老」の名を挙げている。一方、ベトナム語で記述された家系図や Hồng Dư Thắng 氏のインタビューでは、Hồng Trí Nghĩa (洪致義) が第1世となっている。輩行字（通字）の順序のずれや、第1祖を誰に措定するかに関する認識の違いは、族譜編纂の過程で生じたとも考えられ、今後洪氏族譜の読み込みをとおして、今後さらなる分析が必要となろう。

2.1.4 顔 (Nhan) 氏家族 (キン族)

顔氏家族に関するインタビューに答えてくれたインフォーマントの Nhan Đạo Trong 氏は、1952年にミンフオン村に生まれた。Nhan Đạo Trong 氏は来越第1祖から数えて、第7世代目に当たる。顔氏家族はミンフオン村に1家族が居住しているのみであり、また他所の顔氏成員との関係も極めて薄い。

族譜について、2008年に筆者らが Nhan 氏を訪問した際には、顔氏族譜は戦争で喪失したと答えていた。また、父親が早くに亡くなったため、Nhan 氏は自身の祖先の出身地を知らず、後にミンフオン村の村長から福建出身であるとのみ聞いていた。しかしながら、2009年には、Nhan 氏は顔家の族譜を有して

18) Hồng Dư Thắng 氏のインタビューに基づくが、何故彼の息子の姓名が4音節なのかは不明である。

いることが分かった¹⁹⁾。

顔氏族譜（表紙には『顔族家譜略編』と記されている）²⁰⁾によると、来越第1祖はNhan Năng Thành（顔能誠）であり、清朝期に中国福建省の泉州から明郷社に移住したとされている（具体的な年代については、族譜からも不明）。ベトナムへの移住第2祖はNhan Tô Định（顔祖定）であり、第3祖はNhan Đôn Khánh（顔惇慶）である。第4祖はNhan Đạo Truyền（顔道傳）であり、彼がNhan家に現在残されている族譜の序をしたためている。

ところで、顔氏族譜によれば、第4祖Nhan Đạo Truyền（顔道傳）には3人兄弟がおり、それぞれNhan Văn Thụy（顔文瑞）、Nhan Uẩn（顔蘊）、Nhan Văn Long（顔文龍）である。輩行字（通字）は、すでに統一されていないことが分かる。第4祖はおそらく顔氏族譜を編纂したと思われる世代であり、族譜の編纂のプロセス、父系出自アイデンティティの確立と何らかの関係があると予想される。

さて、続いて第5世は現地インフォーマントの祖父であり、Nhan Đạo Trác（顔道倬）である。嗣徳35年（1882年）に出生している。第6世が現地インフォーマントの父である。姓名はNhan Đạo Thân（顔道伸）であり、維新2年（1908年）に生まれた。父のNhan Đạo Thânはフランス植民地期および独立後のホーチミン政権において看護師として勤務していた。現地インフォーマントの息子二人はそれぞれNhan Đạo DueとNhan Đạo Hiếuであり、明らかに世代と関係なく通字として「Đạo（道）」が使用されているのが分かる。

族譜を編纂した第4世以降、5世代に亘って「Đạo（道）」が中字として使われており、すでに顔氏の自身の親族集団に対する認識に変化が生じている。たとえば、顔氏祠堂には漢字ではなくベトナム語のみで「Nhan Đạo Tư Đường（顔道祠堂）」と記されており、「顔」氏ではなく、「顔道」氏として自己認識していることが看取できる。

最後に、現地インフォーマントにつながる系譜の人名のみ以下に列挙しておこう。

1. Nhan Năng Thành（顔能誠）
2. Nhan Tô Định（顔祖定）
3. Nhan Đôn Khanh（顔惇慶）
4. Nhan Đạo Truyền（顔道傳）：1853年生まれ
5. Nhan Đạo Trác（顔道倬）：1882年生まれ
6. Nhan Đạo Thân（顔道伸）：1908年生まれ
7. Nhan Đạo Trong（現地インフォーマント）：1952年生まれ
8. Nhan Đạo Due など

2.1.5 Cam（甘）氏リネージ（キン族）

甘氏家族に関する情報については、現地インフォーマントのCam Mậu Cương氏に対するインタビュー

19) 2009年関西大学グローバルCOE周辺プロジェクト調査の、聞き取り調査班の報告に基づく。

20) 『顔族家譜略編』の序文の執筆年は、維新3年（1909年）とされている。

一調査に基づいている。Cam Mậu Cường氏は現在ミンフオン村に居住しており、中国からの移住者の子孫であることは自覚しているものの、祖先の歴史についてはほとんど知識を有していない。Cam Mậu Cường氏の父が8歳のときに、Cam Mậu Cường氏の祖父が他界したため、父でさえ甘氏家族の祖先の移住の歴史についてはほとんど知らなかった。現地インフォーマントのCam Mậu Cường氏は、3世代のみ祖先をたどることができる。ただし、この3人がベトナムでの開始祖から数えて3世代なのか、本人を中心として3世代辿るものなのかは、Cam Mậu Cường氏本人にも分かっていない。現地インフォーマントが記憶している第1番目の祖先はCam Mậu Lâmである。祖父の名前はCam Tùngであり、漢方医をしていた。現地インフォーマントの父の名前はCam Quâtである。父はベトナム戦争後にダラットに居住するようになり、それ以降ミンフオン村は1度訪れたきりである。このように、輩行字（通字）はMậuに始まり、中字が使われない2世代を間に挟んで、再びMậuにもどることになる。

2.2 ディアリン村

次にディアリン村の中国系住民について見てみよう。ディアリン村に居住している中国系住民はミンフオン村に比べて少なく、康（Khương）氏家族、呉（Ngô）氏リニージ、および侯（Hầu）氏家族のみである。

2.2.1 Khương（康）家族（キン族）

康氏家族の現地インフォーマントはKhương Văn Tài氏である。Khương Văn Tài氏は1932年にディアリンで生まれ、妻はDuong Thị Ngọt氏という名のキン族女性である。現在4人の子供および孫たちと暮らしており、家内製の縫製業を営んでいる。

Khương Văn Tài氏の祖父と父、それに祖父の弟は、フランス植民地時代に海南島の瓊州（Quỳnh Châu）からディアリンに移住した。来越の時期は正確には分からず、漢方薬に関する交易を行っていたことだけが知られている。

Khương Văn Tài氏の父のKhương Văn Khiは3人の息子（つまりKhương Văn Tài氏の兄弟）を連れて海南島に帰った。父の帰国後もしばらく連絡をしていたが、第二次世界大戦がはじまり、連絡は途絶え、現在に至っている。

Khương Văn Tài氏は彼の兄が1981年に編纂した小規模な家譜を有している。まずはこの家譜に基づいて、康氏家族の親族関係と中字の体系を再構成してみよう。1981年編の康氏の家譜によると、Khương Văn Tài氏の祖父はKhương Văn Phongであり、彼が海南島からディアリンに初めに移住した。祖父には海南島とベトナムに二人の妻がおり、海南島の妻は中国人で、ベトナムの妻はキン族であった。祖父はベトナムで他界する。祖父とその中国人の妻はKhương Văn Khiを生み、祖父とベトナム人の妻はKhương Văn Sanhと二人の娘（両人とも20歳代で他界）を生んだ。Khương Văn Khiは娘一人と6人の息子を生み、末息子がKhương Văn Tài氏である。康氏の家譜から分かるように、祖父、父、それにインフォーマント本人までの命名法は、世代の違いを示す輩行字は来越当初から使われていない。この体系はそのまま引き続いており、Khương Văn Tài氏の息子と孫を含めて、康族の通字が「Văn（文）」に統一されている。

ところが、実はこの家譜の記載事項はいくつか不明な点が存在する。まず、家譜と同時に見せてもらった、康氏の祖先の墓碑拓本には、康德という名が記録されているが、家譜には「康德」という名は見当たらない。墓碑拓本には、墓を作った人物が甥の「康文生」と記されている。家譜によれば、「Khương Văn Sanh（康文生）」は来越第1祖 Khương Văn Phong の息子であるので、「康德」はおそらく Khương Văn Phong と一緒に海南島からベトナムに来た Khương Văn Phong の兄弟であろうと思われる。しかし、家譜には「康德」の名は見られず、来越第1祖の兄弟の名前は、チュノムを用いて「康文 hai²¹⁾」と記されている。

姓名と親族関係は、実はインフォーマントの Khương Văn Tài 氏にも不明な部分があり、正確なところは分からない。しかし、この家譜が Khương Văn Tài 氏や彼の兄自身によって記されたものではなく、ディアリンに居住するキン族の僧侶によって書かれたものであることには注目しておいてよかろう。家譜に見られる名前の中にはチュノムが使用されていたり、Khương Văn Tài 氏が記憶しているのとは異なる名前が記載されていたりするの、家譜がキン族によって作られていくプロセスと関係しているように思われる。家の歴史を記すコードが、こうしたプロセスを経て交換されてきたのではないか。

2.2.2 Ngô（呉）リネージ（キン族）

現地インフォーマントは1964年生まれの Ngô Tung 氏である。呉氏リネージの族譜『呉族目録』によって、呉氏の移住と定住の歴史が理解できる。呉氏リネージの来越第1祖は Ngô Thiên Triệu（呉天趙）であり、彼は清朝期に福建泉州近郊の晋江からミンフオンに移住した漢方医であった。族譜からは、Ngô Thiên Triệu が清朝期のいつベトナムに移住したのかは書かれていない。ただし、ミンフオンで生まれた彼の息子の出生年が族譜に記録されている。第1祖の息子の Ngô Thiên Qué（呉天桂）は、1740年に生まれ、1814年に他界している。Ngô Thiên Qué は、漢方医として働いていた。

Ngô Thiên Qué も数人の息子を有していた。現地インフォーマントである Ngô Tung 氏の直接の祖先は、Ngô Thiên Ân（呉天恩）である。Ngô Thiên Ân は1773年に生まれ、1848年に他界している。彼の職業については、族譜に記載されていない。第4世は Ngô Thiên Nhân（呉天仁）であり、1808年に出生している。続いて第5世が Ngô Thiên Đình（呉天丁）、第6世が Ngô Thiên Dậu（呉天酉）である。Ngô Tung 氏の父親に当たる第7世は、Ngô Thiên Ba（呉天花）である。第7世の Ngô Thiên Ba 氏について、族譜には中国語とベトナム語が併記されており、漢字では「呉天花」と書かれているが、ベトナム語表記では「Ngô Thiên Ba」と記載されており、漢字表記とベトナム語の発音が一致していない。

呉氏リネージの族譜から、輩行字（通字）について興味深い点が3点指摘できる。一つ目は、第1祖から第7世までについて、通字として「天（Thiên）」が使用されていることである。この点は明らかに中国的な輩行字のシステムと異なっている。呉氏の族譜は1874年（嗣徳27年）に編纂されており、ミンフオンの有力氏族である陳氏族譜が編纂された年の翌年にあたる。少なくとも族譜が編纂されたこの頃までには、呉氏のリネージ構成員がベトナム式の通字システムを受け入れており、中国式の輩行字システムとの齟齬を問題視していなかったことが分かる。

21) チュノムなので書き起こすことができないが、「台」の右に「二」を付けた字を用いている。

2点目は通字の「天 (Thiên)」が使用されなくなった理由である。現地インフォーマントの Ngô Tung 氏によると、呉氏リニージのメンバーは、ある時期に皇帝から「天 (Thiên)」の使用を禁止されたとされる。よって、Ngô Tung 氏の語るところでは、彼の父親の本当の名前は Ngô Thiên Ba (吳天花) ではなく、字を付けた「Ngô Su」でなければならないのだそうだ。

最後に、Ngô Tung 氏自身の名前についてである。族譜上では、Ngô Tung 氏の名前は Ngô Kim Tung (吳金松) とされている。第8世 (Ngô Tung 氏の世代) はすべて「Kim (金)」を通字として用いている。

まとめると、呉氏リニージでは開始祖から第7世に至るまで、すべて「天 (Thiên)」を通字として用いていた。しかし、第8世以降は、世代ごとにことなる通字を使用しようとしている。以下が、呉氏リニージの直系メンバーとその輩行字 (通字) のシステムである。

1. Ngô Thiên Trieu (吳天趙)
2. Ngô Thiên Que (吳天桂) : 1740年 (庚申) 生まれ。
3. Ngô Thiên Ân (吳天恩) : 1773年 (癸巳) 生まれ。
4. Ngô Thiên Nhân (吳天仁) : 1808年 (戊辰) 生まれ。
5. Ngô Thiên Đình (吳天丁) 1842年 (壬寅) 生まれ。
6. Ngô Thiên Dậu (吳天酉) 1873年 (癸酉) 生まれ。
7. Ngô Thiên Ba (吳天花) 1922年 (壬戌) 生まれ。(ただし、Ngô Sung)
8. Ngo Kim Tung (吳金松) 1964年生まれ。(ただし、Ngo Tung)

2.2.3 Hàu (候) 家族 (キン族)

候氏家族の現地インフォーマントは Hàu Thanh Hải 氏であった。1957年に生まれた Hàu Thanh Hải 氏は、現在ディアリンで大工として働いている。Hàu Thanh Hải 氏の祖父はレンガ (gach) 工場を営んでいたが、彼の父が職を変えて、大工となった。現在はインフォーマントの Hàu Thanh Hải 氏の家族のみがディアリンに居住している。

Hàu Thanh Hải 氏の祖父は、中国の広州からディアリンに移住した。1953年の大水の時に候氏族譜を喪失したため、移住の正確な年代については不明である。祖父の名前は Hàu Văn Khánh であり、祖母の Dăng Thị Chan (鄧氏?) と広州で結婚した。そして、父の Hàu Chac が生まれた。父は本来輩行字 (通字) に「Thanh」を有していたが、中字の使用を嫌い後に名前から外した。その代わりに、息子である現地インフォーマントの Hàu Thanh Hải 氏に、中字として「Thanh」を付けた。「Thanh」は彼の息子にも付けられている。一方、孫の世代には中字として「Mạc」を付けている。すなわち、(第1世) Văn、(第2世) なし、(第3世) Thanh、(第4世) Thanh、(第5世) Mạc となっている。

Hàu Thanh Hải 氏自身は中国式の輩行字 (通字) の使用を重要なものと認識しているが、第2世以降はすでに混乱してしまっている。

2.3 バオヴィン村

バオヴィンには中国系住民が4族居住している。欧（Âu）、符（Phù）、黄（Huỳnh）、Châu²²⁾の4族であり、それぞれ華僑としての意識が高いのみならず、自身の民族名としても「漢（Hán）」や「華（Hoa）」を用いている。また、チーラン通りにある華僑会館とも密接な関係を維持しており、潮州幫の幫長をしていた人や、年に少なくとも1回はチーラン通りの会館に行くという人が多い。本報告では上記4族のうち、欧（Âu）、符（Phù）についてのみ紹介する。

2.3.1 Âu（欧）氏リネージ（Hán [漢]）

現地インフォーマントである Âu Minh Trọng 氏は、中国系住民の第4世である。彼の祖先の原籍地は海南島の Văn Xương（漢字は不明）村である。ベトナムへの移住第1世は Âu Thuân Tu である。18世紀の末に、Âu Thuân Tu は弟の Âu Thuân Diên とともに、バオヴィンに移住した。Âu Thuân Tu はミンフオン陳氏一族の有力者陳踐誠の娘の一人である Trần Thị Tu と結婚した。彼は漢方薬の販売を行うとともに、砂糖と塩の交易も手掛けていた。

欧氏の第2世は Âu Thuân Tu の二人の息子であり、それぞれ Âu Đức Nang と Âu Dục Xuân である。Âu Minh Trọng 氏の説明によると、この第2世から輩行字のシステムが分岐する。すなわち、前者が「Đức（「徳」のベトナム音）」となり、後者が「Dục（同様に、「育」のベトナム音）」となる。Âu Đức Nang の系列の輩行字のシステムは、第3世が「Bang」、第4世が「Mậu」となる。他方、Âu Dục Xuân の系列の輩行字は、第3世が「Đức（徳）」、第4世、第5世がそれぞれ「Minh」「Thiếp」である。欧氏リネージの構成員の多くは、1978年以降にカナダに渡ったものが多く、族譜自体もカナダの親族の家に保管されている。

上記のように、バオヴィンに居住する中国系住民は中国とのかかわりを密にし続けてきた。欧氏も海南会館と密接に関係をもってきた。Âu Minh Trọng 氏の父はフエ市内の高校の校長をしており、チーラン通りで中国語を学び、中国語を話すことができた。父が健在であった時には、Âu Minh Trọng 氏もしばしば海南会館に足を運んだが、現在では1年に1度行くだけである。父とともに会館開館を創設した人物の命日が1年に一度行われており、それに参加するためである。

2.3.2 Phù（符）リネージ（Hoa [華]）

符リネージについてインタビューを行ったのは、バオヴィン通りに面して雑貨屋を営んでいる Phù Thị Bông Lai 氏である。曾祖父の Phù Thế Minh が海南島からバオヴィンに移住した。Phù Thế Minh は海南島に妻子があったが、来越後ベトナム人の妻と結婚した。その後 Phù Thế Minh は海南島に帰り、そこで他界した。曾祖父には3人の息子がおり、長男が Phù Dung Dương で、黄（Huỳnh）姓の中国人と結婚した。Phù Dung Dương が現地インフォーマントの祖父にあたり、曾祖父・祖父ともに漢方薬の販売を手掛けていた。祖父の Phù Dung Dương は海南会館で会計としても働いていた。祖父には息子が一人しかおらず、Phù Hồng Han である。現地インフォーマントの父にあたる Phù Hồng Han は、ベトナム人

22) 漢字の表記は不明。「朱」もしくは「周」ではないかと考えられる。

の妻と結婚した。Phu Hồng Hanも祖父同様に海南会館で秘書として勤務していた。Phù Hồng Hanには3人の息子がおり、長男がPhù Thọ Lợiである。よって、符家の輩行字は「Thế」「Dung」「Hồng」「Thọ」となる。

3 分析

これまで紹介してきたように、フオンヴィン社に現在居住する中国系住民の移住の歴史と輩行字（通字）システムは極めて多岐にわたっており、単純に図式化できるようなものではない。本報告をまとめるにあたり、上記の事例を、①居住地域とベトナム化の問題、②輩行字（通字）にかかわる問題、③族譜の有無について、の3点から整理し直したい。

3.1 居住地域の差異とベトナム化について

ミンフオン村とディアリン、さらにバオヴィンそれぞれの地域において、「中国系住民」であることに関して大きな差異がみられる。バオヴィンに居住する、欧（Âu）、符（Phù）、黄（Huỳnh）、Châuのリネージメンバーは、身分証明書などの公的なレベルにおいて、自らのエスニシティが「漢（Hán）」や「華（Hoa）」であることを認めている。こうした状況が生じた要因の一つは、彼らが近年までチーラン通りにある各華僑会館と密接な関係を有していたことと関係がある。現地インフォーマント自身や現地インフォーマントの父親が、会館での活動に積極的に関係していた。それに対して、ミンフオン村やディアリン村の場合、ほとんどの人は会館とさほど積極的な関係を有していない。こうしたことにより、ディアリンの康家や候家は、バオヴィンの欧家や符家とほぼ同様の移住深度（インフォーマントの祖父の代に来越）しか有していないにも拘わらず、中国的な輩行字システムを存続しえていない。

3.2 輩行字（通字）システムについて

フオンヴィン社の中国系住民における輩行字（通字）システムは、三つに分類することができる。つまり、ベトナム式の通字システム、輩行字繰り返し型（輩行字）スタイル、および中国式の内繰り返し型スタイルである。ベトナム式の通字システムでは、世代を越えて一つの中字（つまり *chữ đệm*）が使用されており、同一の姓を持つ父系リネージ集団であっても、通字の違いによってゾンホ（リネージ）を差異化することが可能になっている。輩行字繰り返しスタイルでは、リネージ構成員は世代ごとに一つの中字を使用しており、ある世代の中字はその次の世代およびその前の世代の中字と異なっている。しかし、中国式の内繰り返し型スタイルと異なるのは、一定の世代を経ると再び同一の順序で中字が出現することになる。さらに、中国式の内繰り返し型（輩行字）スタイルでは、中字が再び繰り返されることはない。

フオンヴィン社における上記リネージ・家族の場合、内繰り返し型スタイルは、バオヴィンにある三つのリネージにおいてしか見ることができない。ディアリンとミンタインにおいては、輩行字（通字）システムはベトナム式、繰り返し型スタイル、両者の折衷型、および不規則変化するシステムである。陳荊和が陳氏リネージについて分析したような典型的な繰り返し型スタイルも、実際には洪氏リネージ

において見られるのみである。一方、明らかなベトナム式スタイルは、康氏家族および呉氏リニージに見られる。

非常に興味深いものは、劉氏リニージの事例である。上記で詳細に検討したように、劉氏リニージではフランス植民地期から数世代にわたって、同一の中字を、世代を越えて使用するベトナム式の通字システムが使用されていた。しかし、劉氏族譜を編纂する過程で、元来祖先が繰り返し型の輩行字（通字）システムを使用していたことに、劉氏のリニージメンバーは気づくに至った。その結果、ベトナム式の通字システムを4世代にわたって使用したのに、リニージメンバーの幾人かは再び繰り返し型の輩行字（通字）システムを採用し始めている。陳荆和に倣って、繰り返し型の輩行字（通字）システムを、明郷人の命名システムの特徴とした場合、劉氏リニージ見られる繰り返し型輩行字（通字）システムへの回帰現象を「再明郷化」現象と呼ぶべきかどうかは今後検討に値する課題である。

3.3 族譜の有無と祖先祭祀

このように、族譜に書かれている輩行字（通字）のシステムは、フオンヴィン社に居住する中国系住民にとって、「明郷」であることや「漢」や「華」であることを示す重要な指標になっている。逆に、族譜が欠如している場合、輩行字（通字）のシステムは不規則なものになる。たとえば「甘氏家族」や「候氏家族」がその事例である。

当該リニージや家族における族譜の有無は、本稿では全く触れることのできなかつた祖先祭祀のあり方ともかなり密接に関係しているように思われる。族譜を有していない甘氏や候氏の場合、来越後まだ3世代程度しか経っていないにもかかわらず、家庭内の祭壇に祀られている人々の中には、祖先の香炉に加えて、同一の父系出自集団ではない親族（母方の伯父など）や、中には先祖の友人など血縁関係にない人物が祀られていることもある。これまで典型例とは考えられてこなかつた祖先祭祀のあり方から、中国系小家族の祖先と自らとの関わり方を考えていくことも必要であろう。

おわりに

今日フオンヴィン社に居住している中国系住民の移住の歴史と輩行字（通字）のシステムは極めて多様であり、モデルや典型例（と見られてきたパターン）を用いて単純化できるものではない。こうした多様性は、移住の後に中国系住民が経験してきた様々な歴史的・社会的・地理的変容を反映したものである。そうした変容とは、河川構造の変化、水害などの自然環境の変容も含まれるし、それに伴う商業区の変化のような社会的変容、戦争にともなう断絶などの政治要因も含まれる。また、男子成員が誕生しないなど、偶発的な要因が変化を引き起こすこともある。

ミンフオンの陳氏リニージのように、歴史上強大な影響力を地域社会に発揮してきた父系出自集団のみが、移住後の社会的展開の典型例として従来着目されてきた。しかし、陳氏リニージの成員のみではなく、フオンヴィン社に居住する中国系住民たちは、祖先の来越の後、刻々と変化する環境のなかで、父系出自システムに関わるコードを柔軟に読み替えながら、今日まで生き残ってきた。典型例とはみなされないような中国系住民の移住史と父系出自集団に関わる物質的・観念的多様性を掘り起こすことは、

必ずしも地域社会の事件史を再構成するのに役に立つわけではない。しかし、当該地位における中国系住民の移住史と、環境の変化に対する戦略を理解する上で、これらの細かな事例は極めて重要なのではないだろうか。

謝辞

本稿は2008年8月28日から9月11日、および2009年8月30日から9月8日の間に、関西大学グローバルCOEの周縁プロジェクトの予算で行った聞き取り調査に基づく。関西大学のグローバルCOEプロジェクトに感謝申し上げたい。また、2008年には聞き取り調査班として、当時PD研究員であった于臣氏をはじめ、大学院生の皆さんと共同で調査することで、本論文のもととなるデータを得ることができた。一緒に調査を行った皆さんに感謝したい。最後に、調査地において、我々の（調査される方からしたらおそらく）無駄なインタビューに長時間付き合ってくださったフォンヴィン社の皆様に、心より謝意を表したい。